

学校教育目標

笑顔で

かしこく

たくましく

上谷の丘

～ 本当の笑顔と学びがある学校を ～

坂戸市立上谷小学校 学校だより

令和3年 3月 26日 NO. 28

文責 校長 柴崎 利美

児童数191名（3月26日現在）

ご卒業、おめでとうございます

～ 4月から 時間が変わり、場所が変わり、世界が変わる
若い命を燃やせ 上谷っ子 ～

卒業生のみなさんは4月から中学生です。仲のよかったクラスメイトも、半分以上はクラスが分かれ新しい人間関係がスタートします。たくさんの人と話し、たくさんのことを考え、たくさんを経験をして欲しい。いいことばかりではないかもしれないが、心も体も燃える年齢になった卒業生のみなさんは、多少のことではへこたれない「強さ」を持っている。上谷小で過ごしたたくさんの「大切な思い出」という心の貯金を持っている。だから「これだ！」と思ったことに思い切りチャレンジしてください。中学校の先生方には「なるほど上谷の子は違う！」と言わせてください。以下、卒業式の式辞から抜粋します。



（在校生による「お別れ式」）

勉強が、苦手でもいい。 走るのが、遅くたっていい。

力が弱くたってかまわない。 あなたは、あなたのままでいてください。

人のしあわせを願い、人の不幸を悲しむことができる。

そんな、優しい あなたのもままでいてください。

たぶんそれは、人間にとって一番大切なことです。

これは「スタンドバイミー ドラえもん 2」 結婚式直前に逃げた新郎のび太へ、新婦しずかちゃんが掛けた言葉です。人の優劣は、それは比べれば限りがない。しずかちゃんのはのび太が持つ普遍的でもっとも気高い価値「人への思いやり」を見抜いていたのです。

全てを失っても、この人となら生きて行ける。そう確信したのです。自分のことより困っている人のことを、それこそ真剣に誠実に考えて

自分のこととして行動に移す。なかなかできることではありません。

中学校に行けばそれこそ忙しい、そして競い合う世界が待っています。どうしても自分のことで精一杯になってしまう。けれども、いかに自分がつらい立場にあっても、友だちを気遣う。一緒に考える。そんな人であってほしいのです。あなたがそういう人になればどうなると思います？人が、周りの人があなたを助けてくれるのです。そう。あなたが助けたように。あまり気付かれていませんが、このことは日本に古くから続く、まさに世界に誇る美しい慣習なのです。これを忘れないでほしい。君達は幸せになるために生まれてきたのです。心の美しい、さわやかな中学生になってください。



「三匹のやぎのがらがらどん」 昼の放送劇 第6弾



今回は1年生。今年度最終です。22日(月)に放送。6年生の卒業に間に合わせました。「三匹のやぎのがらがらどん」はスウェーデンの民話ですが、お子さん、あるいはご自身が小さい時、誰でも手に取って開いたことのある、読んだことのある絵本だと思います。小さいやぎのがらがらどんのしゃべりっぷりと言い、大きいやぎやトロルの堂々としたしゃべりっぷりと言い、みなさんなかなか立派でした。不思議なことが一つあって、放送の

次の日、担当した児童以外の子も、あいさつの声ははっきりとして大きかったり、日常の放送がゆっくりと丁寧で聞きやすかったり、なにかしら「作用」しているようなのです。「役付」いて「活気付」くのはとてもいいことだと思っています。児童も教員も同じです。来年も継続したいと思っています。



読み聞かせは子どもたちは大好き。

子どもたちの心は読み聞かせに飢(かつ)えている。 その2

「読み聞かせ」はその効果が科学的に実証できる部分は少なかったり限定的だったりすると思いますが、先人たちはその効果を経験的に知っていました。語り継ぐという伝承があって、社会は(その規模の大小はあっても)統制が取れていた。というわけです。「勸善懲悪もの」を聞けば、涙を流しながら「悪い事はいけない」とか「困っている人を助ける」ということが心に刻まれる。また、「魑魅魍魎(ちみもうりょう)の不条理もの」であれば心は恐怖に震え「こんな怖いことがあるんだ。世の中は理屈だけでは通らないのだ」ということをやむなく理解し、心に刻まれる。そんな体験を経るから道理がわかるその年齢になれば、すんなり受け入れることができる。とも言えます。



「読み聞かせの時間」がスマホやタブレットにとってかわられるのは、大きく言えば人間(ヒト)の危機ともいえると思います。国や地域特有の経験・文化伝承の断絶はやはりあってはならない。それは映像や音で「過去」のものとして残すものではなく、その年齢でじかに体験・学習するものだと思います。子ども達はそれを体験したい。学習したい。のです。縁あって「その

地」に生まれたわけですから。それは「本能」として言えるものかもしれません。厳しい自然界の中で、まだ弱く小さな自分が生きて行くための知恵を欲しているとも言えます。最も身近な伝承、その原点が「読み聞かせ」であり、「読み聞かせ」はつまり「親子の絆」そのものです。子どもが何度もせがむというのは、それをイメージし自分の知恵とすること。繰り返しになりますが、それを習得する事が本能や命、生きていくことに本質的に関わることを子どもは知っているからだと言わざるを得ません。

頭に広がる壮烈な、あるいは美しい、あるいは・・・。様々なイメージは、ゆくゆくはその子の自発的な読書に繋がっていく。そう思っています。